

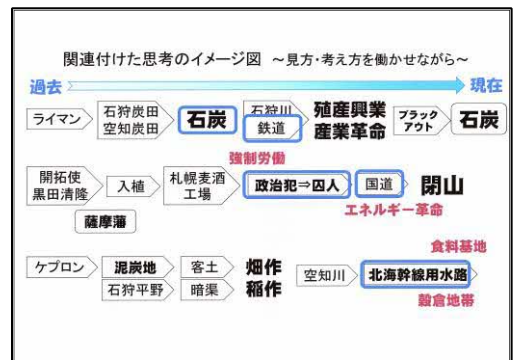
# 地域素材を効果的に活用した教育実践 <日本遺産『炭鉄港』～空知の石炭> ～生まれ育ったふるさとに愛着と誇りをもつ授業づくり～

美唄市立美唄中学校 教諭 鹿糠 昌弘

## I 実践テーマの趣旨

今年度5月、『本邦国策を北海道に観よ～北の産業革命「炭鉄港」』が日本遺産に登録された。「炭鉄港」とは、近代北海道を築く基となった三都（空知・室蘭・小樽）を、石炭・鉄鋼・港湾・鉄道というテーマで結ぶことにより、人と知識の新たな動きを作り出そうとする取り組みである。「炭鉄港」は明治から昭和に至るまで北海道のみならず「日本の近代化」を支えてきた。

右図に示したように「炭鉄港」も含めて空知には、豊かな自然と農業、さらに開拓の歴史がある。多面的・多角的に社会的事象を考える活動において、「時間」「空間」「人・社会の仕組み」を関連づけて思考する力、さらに納得解を持つ学習経験を子どもたちに積み重ねていくことが重要であると考え。また、教科書の内容をより深く理解するためには生徒自身が「自分事として捉える」ことが必要であり、こうした視点から「炭鉄港」の日本遺産登録は、未来を担う子どもたちにとっても大変意義深いものであった。教材としてこのような地域素材を取り上げることで、空知の子どもたちに生まれ育ったふるさとに愛着と誇りを持たせると共に、これから迎える予測不能な変化の激しい時代の中で力強く生き抜く力を育むことができると確信し、教科書との関連も図りながら取り扱う地域素材を吟味して授業実践を行った。



## II 実践の概要

### 1. 授業実践（美唄市立美唄中学校 1年、3年）

#### <教材開発型授業の実践>

美唄市もかつて炭鉱で栄えた町である。しかし、自分の住む地域のことを知らない生徒も意外と多く見受けられた。そこで、昔の街の繁栄を知る地域の方や元炭鉱関係者を招いて、講義を開催した。その中で、空知総合振興局作成のDVDや東明駅が賑わいを見せていた頃の映像、古の住宅マップ等を使いながら、自分たちが住む地域がこれまで果たしてきた役割について学んだ。過去を学んだ上で現在の状況を見つめ、さらに「これからの未来に向かって自分たちが何をすべきか」という課題について考えた。この授業展開時は、これまで官民が一体となって取り組んできた「炭鉄港」が日本遺産に登録された直後ということもあり、生徒の興味・関心は、とても高いものであった。地域にある「ヒト・モノ・コト」を最大限に活用することは、生徒の深い学びにとって、大変有効であることが再確認された。授業に関わって多くの方々にご協力をいただいたことに感謝申し上げたい。



【今後の街のあり方について意見交流】



【炭鉱メモリアル森林公園】



⇒地域にはたくさんの貴重な財産があります



【最盛期の頃の住宅地図】

—生徒の振り返りより—

- ・美唄には何もなく、寂しい所だと思っていたけど、授業を通して、美唄のことを誇りに思うようになった。家族（祖父や祖母）とも昔の話をするようになった。
- ・これまではあまり自分の住むところについて考えたことがなかったけど、今回の学習を通して、知らなかったことを学ぶことができた。
- ・これからの美唄市をどうしたら良いか真剣に考えることができた。

### <教科書活用型授業の実践>

社会科の授業において、「炭鉄港」と各分野との関連性を踏まえ学習指導を行った。地理的分野では「ヨーロッパ州」の単元において、ルール地方との関連・比較を図った。かつて石炭産業で栄えたルール地方は今、その立て坑を利用した観光に力を入れていることを学んだ。歴史的分野では「近代の日本」の単元の前に「炭鉄港」の学習を取り入れることで、その後の授業に対する生徒の興味・関心が高まった。公民的分野では「地方自治の学習」において炭鉱遺産を生かした交流人口や関係者人口の増加等のアイデアを出し合い、今後の美唄市について活発な意見交流を行うことができた。



【左：地理的分野 右：公民的分野】

—生徒の振り返りより—

- ・美唄市がこんなにも多くの面で教科書との関わりがあることを知った。大切な炭鉱遺産を今後も守っていきたい。
- ・自分たちが住む町へのイメージが変わった。教科書との関係が深いことを学んだ。

### 2. 「炭鉄港」に関わる研修会の実施

令和元年9月、長沼町を会場に「空知社会科ほっかいどう学祭り」を開催した。平成28年3月、「世界の北海道」をキャッチフレーズに北海道総合開発計画が閣議決定され「ほっかいどう学」の取組がスタートした。この取組は、子どもから大人まで、より多くの人々が地域づくりに関心を持つ契機を創出するため、地理、歴史、文化、産業等の北海道の魅力や個性について幅広く学ぶものである。本研修会には道内外から、たくさんの参加者が集い、北海道空襲や「炭鉄港」を扱った模擬授業を通して、地域素材の活用のあり方について討議した。その後、「炭鉄港」の重要な炭鉱遺産である夕張市石炭博物館や岩見沢駅舎、レールセンターなどの視察を行った。参加者からは一様に驚きと感動の声が聞かれ、地域にある有形・無形の貴重な財産を子どもたちにも確実につなげていく努力の必要性や、空知が持つ貴重な地域素材を授業の中で効果的に生かしていくことの重要性が再認識された。



【レールセンター前】

### 3. 空知の良さを発信する

平成30年9月、私たちは北海道胆振東部地震でブラックアウトを経験した。その際に停電の復旧に大きな役割を果たしたのが空知の石炭と発電所である。札幌市で行われた『地域と教育を元気にするフォーラム2019「防災と学校教育」』の場において、『炭鉄港～日本の産業革命・日本近代化の原動力「空知の炭鉱が果たした役割」』というテーマのもと、「炭鉄港」に関わるポスターセッションを行った。様々な業種や分野の参加者がいる中で、幅広く「炭鉄港」を理解していただく良い機会になった。また、前北海道知事との懇談会の中で、郷土を愛する子どもたちが今後もますます増えることを期待するといったメッセージをいただくことができた。



【ポスターセッション】



【前北海道知事との懇談】

ふるさとに誇りを持ち、未来に向かってたくましく生き抜く力を育む

### Ⅲ 取組の成果と課題

- 日本遺産に指定された貴重な地域素材である「炭鉄港」についての学習を通して、生まれ育ったふるさとへの愛着や誇りを育むことができた。
- 地域素材と社会科の教科書の内容を関連させることで、教科書の内容を生徒が自分事として考えるようになり、主体的な学びにつなげることができた。
- 地域素材を効果的に活用した授業づくりを進めるため、さらなる教材開発や教材の吟味、教育課程上の位置付けの工夫を行う必要がある。